

シンポジウム

温泉開発と管理経営

日時 平成4年8月25日

場所 霧島国際ホテル

出席者 コーディネーター 湯原浩三

パネリスト 甘露寺泰雄, 細谷 昇, 小島碩夫

地元有志 約30名

【討議要旨】

湯原：温泉ブームといわれ、地方で開発が盛んだ。恵まれた天然資源をいかに上手に利用するかが課題。そこで集中管理方式が注目されているが、

細谷：たくさん掘られているといっても、そう出るものではない。ゆう出量は大きく増えている。だが、掘るとやはり影響がある。水位の低下、温度や成分の変化などが大温泉地で起こっている。資源に限界があるのなら集中管理がいいという方向に行きつつある。

湯原：集中管理すると温泉水の成分はどうなるか。

甘露寺：無色透明、無味、無臭の温泉は混ぜていいが、硫化水素や二酸化炭素、鉄、ラドンなどの不安定成分の多い温泉水は気をつけなければならない。硫化水素は中毒防止のため途中で解放措置が必要だ。

細谷：泉質の違うものを混ぜると、沈澱物が出る可能性がある。鉄泉や食塩泉は絶対混ぜてはいけない。

湯原：最近は瓶詰の温泉水や「温泉の素」といった浴用剤がはやっている。効果のほどは、

甘露寺：いろいろと適応症が書いてあるが、10日から20日間温泉に入り、環境に浸って始めて効果が出ると思う。霧島に来ると瓶入り温泉とは意味が違う。家でするのは温泉療法ではない。それに瓶に適応症を付けると、薬事法に触れる。

小島：源泉と利用場とは効能が違う。引くだけでも問題があるのに、瓶で運んだらどうしようもない。環境庁長官通知にも「1回きり、1日だけの入浴ではダメ」と書いてある。

湯原：地熱開発が盛んだが、温泉地への影響をどう見るか。

甘露寺：地下の同一の貯留層に温泉水がある時は影響が考えられる。現在、地熱発電している地域では、熱水を地下に還元しており、温泉が少なくなるかどうか解析するのは難しい。地熱開発したため温泉がつぶれたケースは知らない。

湯原：霧島のホテル関係者から森林伐採などによる温泉枯渇の懸念が出た。浅い小さな地熱系では森林が少なくなれば、それだけ水の量は減り、温泉は出にくくなる。しかし、その下の大きな地熱系では深く掘ればちゃんと温泉はある。

細谷：山形県で調査したことがあるが、ゆう出系数がどんどん下がっている。これはくみすぎだけが原因ではない。北海道の弟子屈町では河川改修でお湯の出が3分の1に減った例もある。

湯原：大きな地熱系があっても、森林保護は大切ということだ。